

奏であう人

かな

vol.62



ふか せ りゅう
深瀬 龍さん(大蔵村)

昭和61年生まれ、山形市出身。大蔵村在住。大蔵村診療所 医科医長。山形県立中央病院にて初期研修を終了後、「総合診療」を志し、最上町立最上病院、山形県立新庄病院にて診療を行う。山形県立中央病院緩和医療科を経て、2019年より大蔵村診療所に勤務。2020年5月に「新型コロナウイルスの説明書」を村内全戸に配布。今年4月には、「新型コロナウイルスワクチンの手引き」を作成し、好評を得ている。

「日常化」する“災害”から身を守るために

総合診療に取り組み、「コロナは災害と話す深瀬さん、災害時の悩みや問題に寄り添い活動が続ける西谷さんのお二人に、コロナのこと、非常時の心構えなどについてお聞きしました。



大蔵村診療所での診察風景。子どもの風邪から、高齢者の転倒による骨折、心臓疾患、うつ病など、診療科に関わらず対応する。村では自宅での看取り率も高い。そのため、在宅診療にも力を入れ、地域内の多職種と連携しながら、総合的な地域医療を実践している。



にし や りゅう
西谷 友里さん(山形市)

昭和61年生まれ、山形市出身・在住。創業273年の有限会社西谷の9代目跡継ぎ、現在はコンテンツ制作部長を務める。元テレビ制作ディレクターの経験を生かし、営業・ディレクター・ライターを兼務し、個人から企業までさまざまなジャンルの顧客イメージに合ったホームページや動画制作を行う。また、防災士、消防設備士、一般毒物劇物取扱者などの資格を生かし、防災・消防用品、衛生用品販売の業務のほか、防災講座も担当する。



西谷さんが企画した防災ボックス。ミニ炊き出しレシピブックも同梱されており、災害時だけでなく、日常使いでも楽しめるように工夫されている。しまい込まず、いつも見える場所に置けるよう、本棚に収納できるデザインになっているのも特長。

困っている人の 悩みや辛さに応える

深瀬さんが掲げる総合診療とは、診療科や年齢・性別の区別なく、診察・治療を行うこと。「研修中に出会った先生が、患者の疾患の種類にかかわらず対応する姿に感銘を受けました。病気で困っている全ての人に手を差し伸べられる医者でありたいと思っています。」
新型コロナウイルスに関する説明書の作成も、村内の老人ホームで感染が拡大した際、自分ができることを模索した結果だったと言います。

一方、3児の母でもある西谷さんは、ママ防災士の視点で防災ボックスを企画・発売。今年4月には、国の「国土強靱化 民間の取組事例集」に選ばれました。

「ママ友やSNSを通して得た、災害時に必要なもの、あると嬉しいものなどの情報が防災ボックスの企画に結びついています。おいしい非常食や断水時に便利な衛生グッズ、災害時に欲する方が多い甘いものなど、その中身はさまざまです。」

私たちはコロナの被災者 互いに思いやることが大切

深瀬さんは、「コロナを“災害”と捉え、今後の心構えをこう話します。「ワクチン接種が進んでいます。が、引き続き感染予防は必要で、マスク・手洗い・三密の回避が最も効果的で、最善の対策です。」

コロナという非常時が日常化している今、そのしわ寄せで、経済的に余裕がない方や、一人暮らしの高齢者など弱い立場の人たちが、より我慢や不自由を強いられています。私たちがみんながコロナの被害者・被災者であり、誰が悪いわけでもありません。苦しい状況だからこそ、話し合い、助け合い、思いやる気持ちが必要だと思っています。」

これと合わせて、デマなどに踊らされず、正しい情報を見極める力が求められていると話します。

みんなが幸せでいられるよう いつも寄り添っていたい

西谷さんも大きくうなずきます。「実は、日常のなかにも、子どもが急に熱を出してしまったり、コロナ禍で外出がままならず買い物に行けないといった非常時がたくさんあります。そんな時にも、防災セットの非常食が役立つたという声も寄せられています。」

3大アレルゲン(卵、乳、小麦)のイラストを明示した誤食防止シールや、食物アレルギー対応の非常食だけをまとめたセットは大きな共感を呼んだそうです。
「深瀬先生がおっしゃるように、このコロナ禍の状況や災害時に大切な事は、困っている人の悩みに向き合い、気付いてあげること。一人ひとりに寄り添っていききたいです。」

「糖尿病や高血圧の人向けの、甘さ・塩分控えめの健康を気遣ったセットも求められるかもしれません」と深瀬さん。さらにこう続けます。

「総合診療医として私が一人でできることには限りがあります。これからは困っている人と支える人をつなぐ役割も担っていければと考えています。そして、お互いに、山形県に暮らす、多くの人が幸せになれるよう取り組んでいきたいですね。」

